

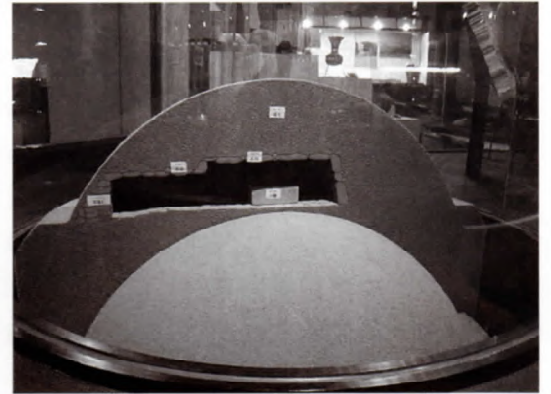
2.2. 横穴式石室の出現

見学の重点

このコーナーに展示してある円墳模型は、笛吹市御坂町にある東日本最大級の石室をもつ姥塚古墳^{うぼづか たてあなしきせきしつ}などを参考に作ったものです。石室の造り方に注目してください。古墳時代前期のものは竪穴式石室が多く、後期のものはこの古墳のように横穴式石室になります。

①横穴式石室はどのようなしくみになっているでしょう。円墳模型のボタンを押して石室の内部のしくみを観察してみましょう。

古墳の石室の形式は竪穴式石室と横穴式石室の2つに大きく分かれます。竪穴式石室は、古墳の頂上から穴を掘りこんで石室をつくり、蓋石を上からかぶせてしまう構造のものです。甲斐銚子塚古墳や丸山塚古墳はこの形式のものです。これに対して、墳丘の側面に出入口が設けられたものを横穴式石室といいます。横穴式石室の場合、石室は墳丘の基底部付近に造られていて、棺を安置する部屋(玄室)と、それに外部から通じる通路(羨道)から成り立っています。入口は石などで閉じられましたが、石を取り除けば再び死んだ人を追葬できる構造になっています。姥塚古墳はこの形式のものです。一般に、古墳時代の前期には竪穴式石室が多くつくられ、後期になると朝鮮半島から伝わってきた横穴式石室が普及しました。



副葬品の内容も、古墳時代後期になると変化が見られます。古墳時代前期には青銅の鏡や玉、剣などマツリに関係するものが納められましたが、後期には馬具や武具、装身具などの実用品が納められるようになりました。この時期には、大陸からもたらされた武器・馬具など様々な製品が国内で作られるようになり、大型古墳とならんで中小規模の古墳にもこれらの製品が副葬されるようになりました。また、須恵器も石室内に納められるようになりました。一方、鏡の副葬はほとんど認められなくなります。玉類ではそれまでの勾玉^{まがたま}、管玉^{くだたま}などに加えて水晶やメノウ、ガラスを使った多彩な玉類が副葬されるようになりました。また、鉄や銅に金メッキを施す技術が伝えられ、馬具類、装身具などが金で飾られました。笛吹市春日居町の平林2号墳からは、金が施された馬具が出土しています。なおこの馬具を含む一連の出土品は県指定文化財です。

社会も転換期を迎えました。大きな墓を築いた有力な豪族以外に、有力な家長層が現われ、集団墓地としての古墳群を築くようになりました。

姥塚古墳は笛吹市御坂町の南照院の境内にある大きな円墳で、昭和40(1965)年に県史跡に指定されました。墳丘はほぼ原形を保っており、直径50m、高さ10mで、二段築造の可能性のある古墳です。周溝は発見されていますが、埴輪や葺石は確認されていません。石室は南西方に開口する横穴式石室で、現存の長さ約18mで全国10位の大きなものです。なお副葬品は全く知られていません。6世紀後半に築造されたと推定されています。

経塚古墳(笛吹市一宮町)



姥塚古墳(笛吹市御坂町)

かむなづか 加牟那塚古墳(甲府市)



23. 古墳時代後期のムラ

見学の重点

このコーナーでは、笛吹市御坂町の二之宮・姥塚遺跡を中心に、古墳時代中期・後期のムラの生活を示す資料を展示しています。二之宮・姥塚遺跡に住んでいた人々が日常生活で使っていた土器、食事の準備に使ったもの、むしろを作った道具などが並べられています。また展示から、ムラの中に鉄製品が広まっていたことが読み取れます。

①古墳時代の中期には、家の中に初めて「かまど」がつくられるようになりました。かまどはどのように使われたのでしょうか。

古墳時代中期から次第に様々な新しい道具や技術が朝鮮半島から伝わってきました。その一つに「かまど」がありました。このかまどの登場によって、米を炊く技術が大きく進歩しました。かまどは住居の壁に接して粘土や石でつくられました。正面に大きく開いた焚口があり、煙出しの穴を外まであけて住まいの中で煮炊きをして煙くないように工夫がされていました。かまどの上には、甕をのせて煮炊きしました。甕などを用いることで米を炊くこともできました。



また、ムラの中に鉄製品が広まっていきました。5世紀の中頃に現れた鉄製のU字形鋤先は、農業技術の向上にとっても役立ちました。今日の鋤や鍬と同じ形・機能をもったU字形鋤先の出現は、開墾に威力を発揮しました。さらに、収穫の道具では、鉄製の鎌が普及しました。

このコーナーで取り上げている二之宮・姥塚遺跡は、笛吹市御坂町二之宮・井之上・夏目原にまたがる遺跡で、弥生時代後期から古墳時代、奈良・平安時代を中心とした大きな遺跡です。姥塚遺跡と二之宮遺跡は、元は別々の遺跡だと考えられていましたが、調査の結果、2つの遺跡はつながった1つの遺跡であることがわかりました。弥生・古墳・奈良・平安時代の住居跡550軒が複雑に重なり合っていて、1軒の住居で使われた土器がセットでたくさん出土しています。また南アルプス市の新居道下遺跡からは、当時使われた土師器のセットが出土されており、食器の組み合わせを知る上で良好な資料です。

古墳時代の服装は、人物埴輪が身につけている服や、奈良県高松塚古墳の石室の壁画に描かれた人物像などから推定することができます。身分の高い人の場合、男性の髪型は、真ん中で左右に分けて耳のところで結ぶ「みずら」で、女性は後ろで束ねていました。衣服は男女とも上下に分かれたツーピースが基本になっています。女性は下はスカートのようなものを付け、男性は太くて長いズボンのようなはかまをはいて、活動しやすいように膝の下を紐で結びます。しかし、これらは盛装した時の服装で、普段はもう少し省略したものを身に付けていたと思われます。農民は、貫頭衣とよばれる布の中央に穴をあけてそこから頭を出して着用する型式のものを着ていたと考えられています。5世紀頃になると、絹織物を織る機が大陸から伝わり、綾や錦といった高級品も作られるようになりました。



姥塚ムラの復元図(後方の大円墳は姥塚古墳)



新居道下遺跡(南アルプス市)出土土器

24. 仏教の広まり

見学の重点

このコーナーでは、県内で最も古い天狗沢窯跡の瓦、寺本廃寺と国分寺から出土した瓦を展示してあります。また、展示室入口には、国分寺の屋根の一部も復元してあります。仏教は6世紀の中頃に日本へ伝わり、天皇や豪族などに信仰されて各地に広められ、多くの寺や仏像がつけられました。

- ①この頃瓦を使って造られたのは、どんな建物でしょう。
- ②丸い瓦と平たい瓦がどのように組み合わせられて屋根にのせられていたか、実物の瓦の形や国分寺の屋根の復元模型を見て考えてみましょう。
- ③山梨県では国分寺はどこにつくられたでしょう。

6世紀中頃の古墳時代後期に、朝鮮半島から仏教が伝えられました。7世紀初めの飛鳥時代から後半の白鳳時代にかけて広まり、全国にたくさんの寺院が建てられるようになりました。朝廷も政治の乱れや自然の災害、病気の流行などを鎮めるために仏教の力をかりようとして、仏教を国の宗教として広めました。奈良時代の聖武天皇は、741年、各国に国分寺・国分尼寺建立の詔を出しました。

甲斐国に仏教が伝来したのは、7世紀後半頃と考えられています。現在のところ笛吹市春日居町の寺本廃寺が一番古い寺です。寺本廃寺は、白鳳時代に創建されて天平時代まで続いた一町(130m)四方程の寺域をもった大きな寺でした。発掘調査の結果、金堂(仏像を安置した建物)、三重塔(仏舎利を埋納した建物)、講堂(仏教行事を行う集会施設)、中門、南門などの跡が発見され、法起寺式の伽藍配置をもつことがわかっています。豪族の氏寺もしくは国府寺と考えられています。瓦葺きの大きな建物は新しい権力の象徴として充分なものだったでしょう。寺本廃寺からは、瓦や仏像の破片など仏教的な遺物が出土しています。蓮の花の模様(蓮華文)で飾った軒丸瓦や重弧文・唐草文の軒平瓦などが発見され、展示されています。これらの瓦は甲府市の川田瓦窯跡などで焼かれたものと考えられています。



寺本廃寺の塔心礎

やがて聖武天皇の命令によって、山梨県でも笛吹市一宮町国分に国分寺が、北へ500m離れた同町東原に国分尼寺が建てられました。国分寺は創建当時200m四方ほどあり、講堂、金堂、五重塔、中門などがたち並んでいたと考えられています。発掘調査によって蓮華文・三重丸の文様の重圏文軒丸瓦、唐草文・重弧文軒平瓦・鬼瓦などが発見されています。甲府市桜井町上土器遺跡などで焼かれていたようです。小さな竪穴住居に住む人々は、高さ約50mの五重塔や巨大な瓦を葺いた建物を見た時とても驚いたことでしょう。

山梨県内には川田・上土器瓦窯跡以外にも、古瓦が出土する遺跡が数ヶ所あります。県内で最も古い瓦が発見された天狗沢窯跡遺跡(甲斐市)では3基の窯などが確認されています。当時瓦は寺院にしか使わないため、「巨麻郡」の豪族が近くに寺院を建てたと考えられますが、未だにこの寺院は発見されていません。



甲斐国分寺イメージ



甲斐国分寺跡出土瓦

25. 律令の広まり

見学の重点

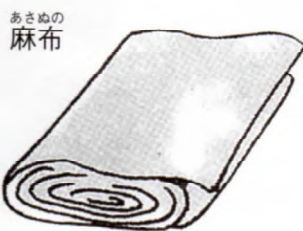
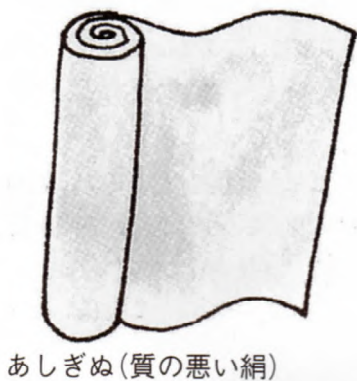
このコーナーでは律令時代の山梨県内の様子をパネルにして展示してあります。「律令時代の山梨」と題した地図のパネルは「和名類聚抄」という本に見られる山梨県の古代の郡郷名とその推定地が記されています。あわせてこの時代の山梨県に関する文字資料が紹介されています。

- ①律令時代に山梨県は何という国の名前でよばれていたのでしょうか。
- ②律令時代に山梨県に置かれた4つの郡の名前と位置をパネルで確認してみましょう。
- ③律令制のもとで山梨県の農民はどのような税を納めていたか、調べてみましょう。

統一国家をつくり上げた大和の豪族たちは、天皇を中心とした中央集権国家の完成をめざし、大化の改新(645年)を経て、地方豪族やすべての人々を支配するために律令制度を取り入れました。全国を国・郡(評)・郷(里)に分けそれぞれ国司・郡司・郷長(里長)を置きました。国司は中央貴族が任命され一定の期間で交替しましたが、郡司には地方の豪族が任命されました。国は規模により大・上・中・下の4級に格付けされ、また畿外諸国は京よりの距離で近・中・遠国に区分されました。律令制度のもとで今の山梨県は甲斐国と呼ばれ、等級は上国、郡の数は山梨・八代・巨麻(巨摩)・都留の4つ、距離による区分は中国でした。郡の下には郷(里)が置かれ、31の郷名が知られています。

農民が納めた租税は、租(口分田でとれた稲の収穫高の約3%にあたる分を納める)、庸(労役のかわりに布などを納める)、調(地方の産物を納める)があり、庸と調を都や郡の役所まで運ぶのも農民のつとめでした。平城京跡で見つかった荷札木簡などにより、山梨県からあしぎぬやクルミなどを納めていたことがわかっています。その他、国司の命令で地方の土木工事にあたる雑徭、都・九州の警備などにあたる兵役などがありました。これらの負担は非常に重く、農民の中には苦しさに耐えかねて土木工事の現場から逃亡したり、口分田をすてて他の土地へ移ったりする者がたくさんでてきました。甲斐の国司から都に出された報告書の中に「都で労役に使われる仕丁として働いていた、甲斐国の巨麻郡栗原郷の漢人部町代が逃げたので、天平宝字5(761)年同じ郷の漢人部千代という者をおきかえりにつかわした。」という内容のものがあります。しかし、その千代も翌年逃亡してしまいました。

●山梨から都に運ばれた税



出土したクルミ



クルミの荷札につれられた木簡
(平城京出土)



●トピックス 古代の甲斐国と国府

古代の「甲斐」という国名は、『古事記』では開化天皇の段に、天皇の孫という沙本毘古王を「日下部連・甲斐国造の祖」と記されていることや、『日本書紀』雄略天皇13年9月条に、「甲斐の黒駒」の説話が見えるので、5～6世紀頃から甲府盆地一帯が「甲斐」と呼ばれていた可能性があります。しかし、『甲斐国』という国名が正式に定められたのは、律令制の基礎が定められた7世紀中頃と考えられています。

『甲斐』という名称は、旧来、山と山の狭間を意味する「峽(かひ)」とするのが通説でしたが、近年は甲斐の枕詞「なまよみ」すなわち「半黄泉」から、険しい山に囲まれた地形が死者の国との境界の意である「境(さかい)」から命名されたとする西宮一民氏の説が有力となりました。さらに最近では平川南氏による、東海道と東山道をつなぐ「行き交う」土地から、律令国家から『「交(かい)」国』＝『甲斐国』とされたとする説も有力です。

律令制度では各国に国司や郡司が置かれ、その政務を行う国府や郡衙おかれしました(『和名抄』)。甲斐の国府は笛吹市春日居町国府や同市御坂町国衙の地などが想定されていますが、まだはっきりとした遺跡は発見されていません。しかし、春日居町国府では礎石を持つ大きな倉庫や建物跡が発見されているので、国府か山梨郡衙跡の可能性もあります。

甲斐国には山梨・八代・巨麻・都留郡の4郡(最初は「評一こおり」)が置かれていましたが、これら郡役所跡はまだ発見されていません。先ほどの春日居町国府一帯を山梨郡衙と見るのも有力で、遺跡から焼米なども発見されています。

各郡の下には郷(里一さと)がありました。郷は50戸で編成され、山梨郡10、八代郡5、巨麻9、都留7の31郷です。最近の発掘調査で「表門(うわと)」「石禾(いさわ)」「玉井(たまのい)」「林(はやし)」などの墨書土器があり、笛吹市一宮町大原遺跡出土の「玉井郷長」墨書は郷の組織を知る上で貴重な発見となりました。

また、律令時代には租税の運搬や通信のための道路(官道)が整備され、甲斐国には東海道の横走駅から枝道が造られ、箆坂峠・御坂峠を越えて甲斐国府に到達していました。この道には「水市・河口・加吉」の3カ所に駅が置かれ、通説では加吉は加古(かご)の書き誤りで箆坂峠からおりた山中湖周辺、河口は河口湖近辺、水市は御坂町黒駒か一宮町市之蔵あたりと推定されていますが、近年平川南氏により、逆に駅が置かれたという説も出されています。なお駅の位置を示すように、富士河口湖町の河口から「川」、同町滝沢遺跡で多数の「川」という刻書・墨書土器の出土もあります。これらは河口駅に関わりがある遺跡ではないでしょうか。



「和名抄」所載の甲斐国郡郷配置推定図



甲斐国の国府と駅路

いずれも『山梨県史概説編 7山梨県のあゆみ』より

26. 奈良・平安時代の村

見学の重点

このコーナーは、奈良・平安時代の農民の生活の様子を示す資料を展示しています。笛吹市御坂町二之宮遺跡をはじめとして県内各地の遺跡から出土した焼き物や鉄製品、木製品等を展示しています。

- ①奈良・平安時代の山梨県の農民はどのような器を使っていたのでしょうか。展示してあるものの中からさがしてみましょ。
- ②鉄で作られた道具にはどのようなものがあるでしょう。展示してあるものの中からさがしてみましょ。
- ③この時代になると坏とよばれる底の浅い碗などに文字が書かれることがありましたが、展示してある坏にはどのような文字が書かれているでしょう。

奈良・平安時代には、都には壮大な寺院が立てられ、優雅な生活を送っている貴族によって政治が行われていました。当時山梨県は馬の産地として知られ、3ヶ所設けられた御牧から毎年一定数の馬が皇室に献上されていました。しかし、一方では、各地に貴族や社寺の荘園がつくられ、私有地が増大していきました。山梨県でも平安時代末に荘園をめぐる争いが国の役人と荘園領主との間で起きています。

農民の多くは、方形の四畳半くらいの広さしかない竪穴住居に、1家族4～5人で住んでいたと思われます。山上憶良の貧窮問答歌(『万葉集』)には農民の様子が歌われています。住居の壁際にかまどが設置され、住居外へ煙を出すための煙道を設けています。また、持ち運びのできる置きかまども発見されています。石で組んだり木の柱をはめた井戸もつくられています。畿内ではこの頃すでに平地住居や高床住居に住んでいましたが、東国では大部分の農民は依然竪穴住居に住んでいました。



また、鉄製の農具が広まりました。有力な農民も鉄製の農具をたくさん手に入れ、鉄製の鍬や鋤などで水田開発や土木事業を行いました。北杜市大泉町東原遺跡、同武川町宮間田遺跡などでは、村の中に鋤や鍬などの農具をつくったり修理したりする鍛冶屋の跡が見つかっています。小さな小屋の中央に一抱えもある台石が置かれ、まわりに鉄の小片が飛び散っていたので、その台の上で鉄器をつくっていたと思われます。

奈良・平安時代の焼き物には、素焼きで赤い土師器と、窯で焼かれた灰色の須恵器、釉をかけた灰釉陶器の3種類があります。毎日の生活に使う器のほとんどは土師器でした。坏、碗、蓋、甕、羽釜などが知られています。甕や羽釜はかまどにかけて使用しました。現在の甲府市東部ではこのころ、甲斐型土器とよばれる山梨県特有の土師器を盛んに生産していました。灰釉陶器は9世紀頃から県内各地に普及し、緑釉陶器なども見られます。その生産地は濃尾平野を中心とした地域です。

鉄器の普及



すきさき
鋤先



のこぎり



かま
鎌



やっこ
とこ

27. 掘り出された中世

見学の重点

このコーナーでは、中世(鎌倉・室町時代)の資料を3つに分けて展示してあります。「くらしの道具」では、南アルプス市^{だいしひがしたんぼ}大師東丹保遺跡から発見された当時の一般の人々が日常生活に使った道具を並べました。「とむらい」では当時の人々が死者をどのようにとむらうか、南アルプス市^{にほんやなぎ}二本柳遺跡・^{きょうばら}笛吹市京原遺跡・^{にしかわ}北杜市西川遺跡・^{こいかわ}中央市小井川遺跡などの関連した遺物を並べました。「館のくらし」では各地の有力者が所有していた器を展示してあります。

- ①中世に山梨県各地の人々は、どのようなものを器として使い始めたでしょう。「くらしの道具」の所に並べられている器を観察してみましょう。
- ②中世にはどのような墓がつくられたでしょう。「とむらい」の所に並べられているものを見て考えましょう。
- ③各地の有力者が所有していた陶磁器はどこから入ってきたのでしょうか。

鎌倉時代から江戸時代が始まるまでのおよそ400年間を中世とよびます。武士が台頭し、武家政権が成^{せい}立し、やがて激しい権力争いを行うようになる時代です。その頃山梨県では、清和源氏の一族である源義清・清光父子が勢力を拡大して、やがて甲斐国全体を支配する武田氏に引き継がれていきました。

中世には庶民の間でも米を常食することが普及しました。武士などは今の飯にあたる柔らかい飯を食べるようになりました。食事には漆器、土器(かわらけ)、陶磁器などの器が用いられていました。陶磁器では、海外貿易で中国産のものが多く輸入されています。大甕は水甕などに用いられました。この他、薄い板を曲げて桜の皮でとじた^{まげもの}曲物の桶も使われていました。南アルプス市の大師東丹保遺跡では、織機に使う糸巻きやしゃもじ、扇子、中国製青磁やか^{おおがめ}わらけ、鍋、鉄製の鎌やはさみ、扇子、漆塗りの^{みづかめ}碗や下駄が発見されています。かなり様々な木製品が普及していたと思われます。

中世においては、死者を手厚く葬ることは少なく、僧侶や武士だけが五輪塔のような碑を建てたり、火葬にして骨を壺などに納めたりしていました。また、^{ぞうこつき}蔵骨器などに^{ろくどうせん}六道銭の風習によって副葬することがありました。六道銭とは、魔除けとか死者が三途の川を渡る時の通行料ともいわれており、死者の首にかけの袋に入れて埋葬されていました。枚数は6枚とは限らず、多量に出土する例も多いです。山梨県でも^{なべつるづか}笛吹市境川町の京原遺跡や^{いたとうぼ}甲府市下向山町の鍋弦塚等から蔵骨器が、南アルプス市二本柳遺跡などから六道銭や板塔婆、呪符木簡などが発見されています。中央市小井川遺跡は、寺院の跡と考えられ、大型建物の周辺からは五輪塔や硯、ハシ、陶磁器が多量に出土しました。



金生B遺跡出土の金属製品



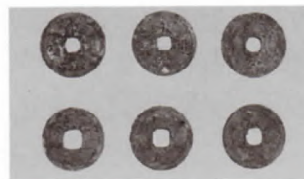
二本柳遺跡出土の内耳土器



大師東丹保遺跡出土漆塗り碗



鍋



二本柳遺跡出土の六道銭



鍋弦塚出土



小井川遺跡発掘状況